

河出文藝選書

かさぶた式部考
常陸坊海尊

秋元松代

河出文藝選書

かさぶた式部考
常陸坊海尊

秋元松代

秋元松代（あきもと まつよ）

明治四十四年、東京生まれ。

昭和三十五年、「村岡伊平治伝」劇団仲間上演。芸術祭奨励賞。

昭和四十年、戯曲「常陸坊海尊」で第五回田村俊子賞。翌々年、芸術祭賞を受賞する。

昭和四十四年、「かさぶた式部考」演劇座上演。翌年、毎日芸術賞を受賞する。

昭和五十年、戯曲集『七人みさき』刊行。（読売文学賞受賞）

著書に随筆集『戯曲と実生活』、評伝『菅江真澄・常民の発見』他

河出文藝選書

かさぶた式部考 常陸坊海尊

昭和五十一年三月二十日 初版印刷
昭和五十一年三月二十五日 初版発行

著者 秋元 松代

装幀者 横山 宏輔

発行者 佐藤 皓三

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座（東京）一〇八〇二

電話 二九一―三七一一

印刷 多田印刷

製本 若林製本

©1976 MATSUYO AKIMOTO

目次

かさぶた式部考

3

常陸坊海尊

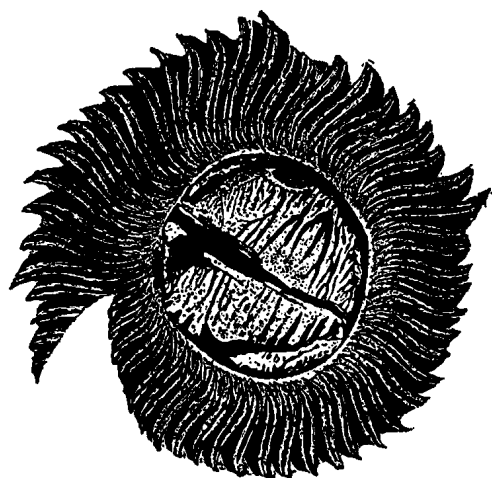
113

あとがき

203

版画イラスト・榎戸真喜

かさぶた式部考
(三幕六場)



登場人物

大友伊佐（農婦53歳）

〃 豊市（その長男30歳）

〃 てるえ（豊市の妻27歳）

智修尼（六十八代目和泉式部30歳）

うめ

宇智子

鶴作（肝煎）

ふじ（支部長）

ゆり

万太郎

小次郎

はる

きく

夢之助

光子（付△）

なつ

あき

初旅の女

村の青年 1

〃 2

おめぐりの女 A

〃 B

〃 1

〃 2

おめぐりの人々大勢（男・女）

第一幕

九州。玉島村の小農である大友豊市の家。——舞台にみえるのは家の一部である土間とそれに続く板の間で、その奥に部屋のある模様。土間の外は前庭つづきに往還があり、田畑と遠景の山脈がみえる。前庭にポンプ式の井戸。

板の間に豊市（30歳）が毛布をかぶって転た寝している。——秋の収穫が終った季節の午後三時すぎ。

.....

往還をおめぐり姿の宇智子（16歳）がくる。金剛遍照和泉教会と染めた襦をかけ、雑糞や水筒を帯び、鉦と白木の杖を持っている。

宇智子、ポンプをみつけて水を飲む。空の水筒へも水をつめる。

同じおめぐり支度の宇智子の母、うめ（40歳）、歩き疲れた足どりでくる。二人はすでに数日に亘る旅をしてきた貧しげな親子連れである。

宇智子
お母ちゃん。よか水ばい。飲みなはらんか。

うめ　　そうか——。なら頂戴しまっしゅう。

宇智子　（家の中をのぞいて）誰ぞおんなはる。尋ねてみまっしゅうか。

うめ　　……ばってん寝とらす如^{ごと}たる。起こしちゃんらんばい。

豊市、寝がえりして何か呟く。

宇智子　目の覚ましとらすたい。尋ねてみまっしゅう。——ごめんなはるまっせ。

豊市　……………。

宇智子　御無礼ばいたします。

豊市　……………。

宇智子　ちいっとお尋ねのしたかですたい。

豊市　はいっ！

豊市、とび起きて正座し、二人をまじまじと見つめる。無垢な、しかし茫漠とした表情である。

豊市　はい。

宇智子　（くすくす笑う）

うめ　　済まん仕儀でござるました、よう寝とんなはったところを——。

豊市　はい。

うめ　　私どんは、おめぐりばしとる者でござるますたい。玉島村の公民館ば探しとるんですが、

道の分らんとですたい。私どんはここの者ではなかもんで、どっちゃの方い参ったらよか

か教えて下はるまっせ。

豊市、ただ二人を不審そうに見比べているばかりで答えない。

宇智子 お母しゃん。ここ、玉島村とちごうとじゃなかね。

うめ そぎゃん答はなか。

宇智子 (そっと) まアだ寝とぼけておんなはるばい。(くすくす笑う)

豊市 (眩く) かもちゃならん。——分つとる。

うめ あのう、私どんは同行の衆にはぐれてしもうた者ですたい。公民館へ行けば、同行と落ち合う事の出来つとですけん、何ん様、気の急いてならんとですたい。どっちゃの方角か教えて拝領。

宇智子 まアだよっぽど遠かですしゅうか。

豊市 (眩く) かもちゃならん。ばってん……啼きよる——。

うめ はあ? なんですな?

宇智子 お兄しゃん。もつとすきつとお言うて拝領。

豊市 ……蟬どんの啼きよる。百匹千匹啼きよるばい。

うめ はあ?

豊市 蟬どん百匹千匹たい。遮二無二俺に付きからもうて離れよらん。

うめ ……………?

宇智子 ひどかお人ねえ! お母しゃんと私のこつを蟬どんじゃと! まア見かけん似合わんえ、ぐなお兄しゃんばい。

うめ まアよかちゅうとに。

宇智子 ばってん口惜しか! (豊市に) 私どんは蟬どんじゃなかよ。信仰の情熱ん燃えち、日向

ノ国の御本山までお詣に行くつたい。そるを蟬どん呼ばわりすつとは失礼でしゅうが。

うめ 宇智子、やめまっせ。御縁の無アお人にや、私どんの如たる者は蟬どんに見えなはるばい。
さ、早う行こう。よそで尋ねようばい。

宇智子 ま、いっちょ待ってはい。なんば私どんが貧乏人じゃてち、和泉教会の侮辱さるつとは堪らんわ。——お兄ちゃん。この和泉教会ちゅう禪ばようお見まっせ。私どんはね、和泉式部さんのお弟子ですたい。

豊市 で、し——?

宇智子 ふむ。ああた、式部さんばお知らんとなう——そうな。

豊市 知らんばってん、無憎らしかね。

宇智子 誰がア?

豊市 あんたがそぎゃんたい。

宇智子 わア潔い! 私ば無憎らしかと! (照れくさくなって笑う)——お世辞ん如たるもんお言
いますな。私ば無憎らしいてち——。(笑う)

豊市 よう笑いよらす。可愛いかね。

宇智子 ま、言うとらすわア。(少女の媚態で) そぎゃんでんなかけど——。

豊市 ほおんに可愛らしか。

宇智子 知らん。——さっきは蟬どんの何んのでち、悪口あつこうもっこう言うとりして——。異風いふうなお兄えちゃん。

豊市、細工用の材料の入った箱をひきよせ、絹糸で編みあげた尾長鶏を取り出す。

豊市 あんたにあぐつたい。

宇智子 わア奇麗かねえ！ 尾長鶏おながけたい。

うめ ほおんに美しか。よう出来でけとる。

宇智子 これ、お兄ちゃんの作りなはったん？

豊市 うん。あんたにあぐつたい。

宇智子 お母ちゃん。もろうてんよかなア。

うめ 折角せがくだけん頂戴ていだいしなはり。仏縁ぶつえんでござるまつす。（合掌する）

宇智子 ほおんにそぎやんたい。お兄ちゃん。逢うたは御縁ごえんと言いますけん、和泉教会の歴史ば教おしえてあげまつしゅうか。

豊市 （うなづく）

宇智子 こぎゃんとを因縁いんえんちゅうとよ。そいならよとお聴ききまつせ。（合掌し単調な抑揚をつけて）いにしえ一条の帝の御代、上東門院の局に仕うまつれる和泉式部は、世にたぐいなき歌詠かぎなりけり。さるほどに娘小式部の内侍、仮初めの病により、ついにみまかり候いぬ。母式部の嘆なげき言わんかたなし。いまは発心のまことを行ぜんのひと、花の都を立ち出でて、一笠一杖の浮雲に身をまかせ、諸国七道遍歴して、わが子の菩提をとむらいつつ、生々世々の親

と子の、深きえにしを願いけり。——南無薬師、諸病悉除しじよの願立てて、身より仏の名こそ惜しけれ。——南無薬師、遍照金剛。(くりかえす)

途中からうめも同唱する。豊市は次第に、緊張と拒否と怖れの表情になる。

宇智子 分んなはったか? ——どぎゃんしなはったと。

豊市 (怖れで) はい。そぎゃんたい。市太郎長男、大友豊市。三十歳。妻、てるえ。母、伊佐

うめ なんのこつですな。ああた——。

宇智子 お兄しゃん——。

豊市 はい! 昭和十二年、十一月、八日生れ。農業——。もう、どこも何アんとむなかです

ばい。なかですばい! (苦痛の表情になる) 何アんとむなかない。はい! そぎゃんです。

うめ ああた——。(気味悪くなつて) 宇智子、外い出なはり。外い——。

宇智子 お母しゃん——。気味ん悪かア。

豊市 (両耳をおさえて) ああ! また蟬どんの啼きよるばい! 百匹千匹啼きよつと! (突っ伏す)

うめ、宇智子、驚いて見つめる。豊市の母伊佐(53歳)野菜を入れた箆を持って帰ってくる。二人のおめぐりと伴の様子に目を走らせる。

伊佐 豊! どぎゃんしたつか! ——確りしなはり。大丈夫か。

豊市 母しゃん——。

伊佐 また蟬どんかい。そうな。いま母しゃんの追っ払うてあぐったい。ちょこつと留守にした

とが悪かったつ。さ、さ——（枕や毛布を当てがう）もう母しゃんのおるけん、いっちゃん心配なかぞ。安心しなはり。氣ば静かアに寝なはり。じつきにようなる、ようなるよ。（赤ん坊のように背を叩いて）——蟬どんの、悪五郎も苦四郎も、遠くい逃げよったばい。阿蘇んお山へ逃げたげな。遠かけん戻っちゃこられん。寝なはり。——寝なはり。

豊市は眠りに落ちて行くらしい。伊佐、にがい思いで伴を見つめている。

うめ あのうち——。伴さんな加減の悪かとですか。

伊佐 ……………。

うめ 私どんは何アんも知らんでしたもんで——お氣の毒ななアい。

伊佐 ああた達は誰な。——（口惜し涙がにじんでいる）うちの伴にかもうとはやめて拝領。なしでござん酷かこつばしなはるとですか。

うめ いんえ、私どんは——。

伊佐 かもうて下はるなと言とりますばい。伴は、こぎゃん頭のあんばいの悪かもんには相違なかばってん、母親の私が付いとりますけん、人さんにや迷惑はかけとりますせん。どうか放つといて拝領。

うめ いんえ、ああた。私どんはおめぐりばしとりまして——。

伊佐 もうもう分つとりまっす。ああた達の言わすこつは、みいんな同じですばい。伴がこぎゃん有様になってからちゅうもん、真理教てろの幸本教てろの、等知教会てろの、ぐっさり来らした。神信心ばして救うてもらえてち、朝に晩に私どんば責めさしたたい。そなたびごつ

に倅は、今ん如たる発作の起きよって、苦しむですばい。(涙を落して) やめてはいよ。もうたくさんですばい。

うめ 因果なアい。そるにしてん聞いて下はり。私どんは通りがかりん者ですたい。倅さんの急に喚びなはったけん、魂消ってしもて、出るも引くもならんごつでしたたい。私どんは何アんの策略もしまっせん。機嫌ば直して拝領。

伊佐 ……そぎゃんだったつね。

うめ へえ。

伊佐 そりゃ御無礼しました。悪う思わんで下はり。

うめ なんのなんの。

伊佐 ああたたちゃア、おめぐりばしとらすとね。すんなら、何んぞ御報謝しまっしゅう。錢や無かけん、米でん持ち行きなはるか。

うめ この上も無ア。

伊佐 ちいと待ちなはり。

宇智子 おばしゃん。御報謝ならお兄しゃんもお呉れましたたい。(尾長鶏をみせて) ——お兄しゃんの病氣ちゅうとは、どぎゃんもんな。なしてあんばいの悪うならしたとね。

伊佐 ……話しとうなか。聞かんといて下はり。

伊佐、米櫃から若干の米を紙袋に移す。

宇智子 (母の耳許で) なあ、深ア事情のあるごたるね。

うめ そうらしかねえ。

宇智子 あぎゃんお人こそ、仏さんにお縋りせにやならんとでしゅうが。

うめ そりア言うが愚か。

伊佐 (米袋を持つてくる) 僅かばってん氣持ば受けてはいよ。

うめ (合掌) 御厚志でござるまっす。

宇智子 (受けて) ありがとうさん。仏さんのご覧んじやりますたい。

うめ なあお家さん。事情は知りまっしえんばってん、ああただけでん、信仰ば持ちなはったらどぎゃんでししゅうか。私どんが手助けばいたしまししゅう。

伊佐 そぎゃんお話なら無駄ですばい。早う去にまっせ。(二人を無視するように炊事仕事を始める) うめ 無駄と思うて聞いて拝領。現に私と娘が、仏さんに救うて頂きましたたい。おのれ一人の力で何んが出来まっしゅうか。仏さんは慈悲の深うして、十方世界ば遍照し給うとですたい。

宇智子 おぼしゃん、南無薬師遍照金剛と、お唱えするだけでんよかよ。心ん平和ちゅうもんば授けらるつとたい。心ん平和、そるが仕合せちゅうもんばい。

うめ ああたにや、伴さんの病氣ちゅう、身の悶着のあんなはるとでししゅうが。そるこそ、仏さんのお力の、現世眼前に現わるるための因縁ですたい。そるば、よおとお考えなはるまっせ。ああたの眼の明かん限り、伴さんも救わるる時やアなかですよ。

伊佐 (腹を立てて) まアだ意地公事とものば言うとらすとか! 誰でん彼でん同じこつばア、耳